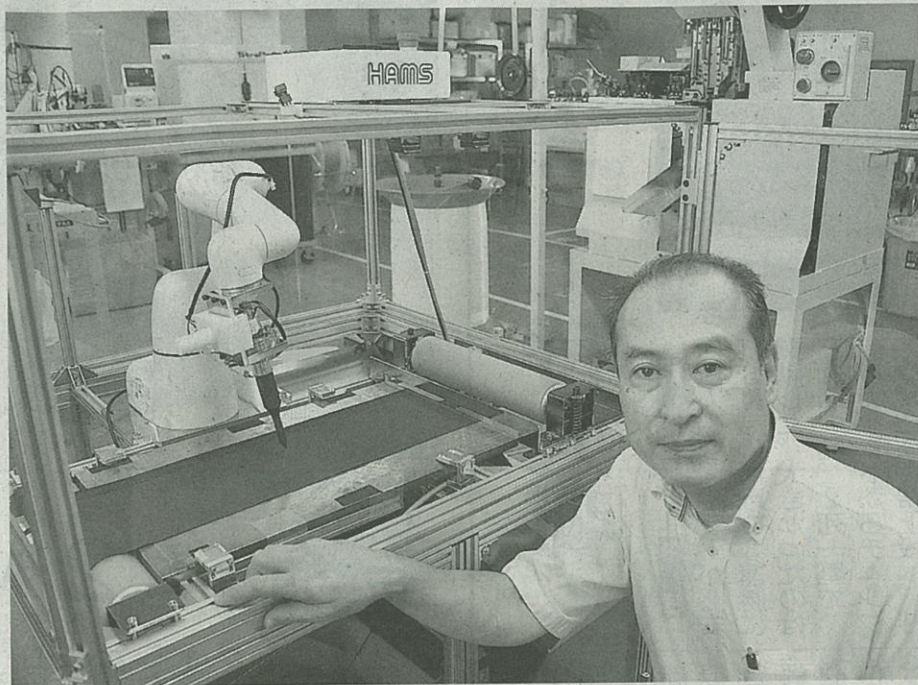


縫う 結ぶ 通す 生活密着

近畿の底ぢから

工業用ミシンをベースにした自動装置を開発するハムス(京都市南区)は創業以来、「縫う、結ぶ、通す」の技術に強みを発揮してきた。女性用下着やジーンズ、ランニングシューズから車のシートベルトに至るまで、その技術が生かされた商品はどれも、私たちの生活に身近なものばかりだ。新型コロナウイルスの感染拡大で先行きが見通せない企業が多い中、新たに生まれたニーズに即応するため、知恵を絞っている。



ハムスの宮地康次社長。横にあるのが新たに発売したマスク製造ロボット「ハムイー・ポッター」(京都市南区)

ニーズに即応 マスクロボ

ハムス(京都)

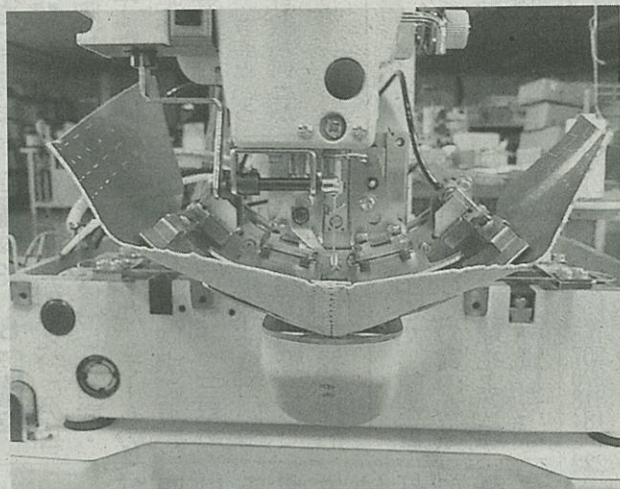
「日本製のマスク製造器を探してほしい」。3月半ば、ハムスの宮地康次社長(58)は、中国で自社製品を営業する代理店に頼まれた。新型コロナウイルスが猛威を振るい、取引先の工場が至急欲しいという。日本の知り合いに聞くと「注文の電話が鳴りっぱなし。とても無理だ」。結果を伝えると言われた。

「ハムスさん、自分で作れるでしょう?」

その一言がきっかけで開発したのが、今月発売したマスク製造ロボット(税別398万円)。アーム式ロボットの先端にある超音波カッターで、生地を裁断する。事前に形状を設定し、ボタンを押せば約30秒で1枚できる。宮地社長は「マスクの備蓄が必要な自治体や介護施設にニーズがあると思った」。注文や問い合わせが相次いでいる。

65年、国内の大手下着メーカーに頼まれ、ブラジャーの留め金を縫い付ける自動ミシンを開発した。この分野で国内100%、海外でも約50%のシェアを誇る。

その後、ブラの肩ひもを縫い付けたり、リボンを結んだりする装置の開発に成功。75年には、ジーンズのベルトを通すループの自動縫い付けミシンを作ってリーバイスの全工場で採用され、会社の躍進につなげた。



ランニングシューズのかかと部分を機械で縫うのは難しいとされてきた。ハムスはミシンの平台をおわん状(金属部分)にカーブさせ、シーソーのように動かすことで機械化に成功した(ハムス提供)

ハムス 「宮地ミシン工業社」として1954年に創業。社名は「Human Apparel Machine System」の頭文字からとった。機械に任せられる仕事は機械に任せ、人は少しでも人間らしい仕事をするとの意味という。従業員約30人。年間売上高は約6億円。

2012年にはアディダスの依頼でシューズのかかと部分を縫う自動ミシンを作り、省力化に大きく貢献した。どの技術も、「営業マンが足りなく顧客のもとに通って困りごとを聞き、試作を重ねる。それを愚直に繰り返した結果です」と宮地社長は言う。

9月には、飛沫を防ぐプラスチック製のボードを裁断できる機械を売り出す。「素材やサイズ、デザインを自由に選べる。価格は120万円程度と手頃です。飲食チェーン店などに使ってもらえれば」。コロナ以前は売り上げの8割は海外だったが、当面は国内向け販売に力を入れる。

(佐藤秀男)

◆第2京都版は、しばらく休み、9月1日から再開します。